

歴史に学ぶ今後の地震対策

名古屋大学 福和伸夫

東日本大震災は千年に一度の震災と言われます。前回の地震は、平安の初期、西暦 869 年に発生した貞観地震と考えられています。六国史の最後の正史・日本三代実録には、仙台市郊外の多賀城で津波により 1000 人が犠牲になったと記されています。

多賀城は、陸奥国に設置された国府で、大宰府と並ぶ我が国の最重要拠点だったようです。貞観時代は、自然災害が多発した時代でした。貞観地震に先立つ 863 年には、越中・越後で大地震が発生、翌 864 年に富士と阿蘇が噴火、868 年には播磨・山城で大地震が発生しています。この時代、隕石の落下や、海賊の来襲、疫病、干ばつや水害など、災いが続きました。そこで、貞観地震のあとに、災いを治めるために祇園で御霊会が行われました。これが、祇園祭の始まりと言われています。貞観地震の後も、肥後、出雲、千葉などで地震が続きました。878 年には関東で、さらに 887 年には東海・東南海・南海地震が発生しています。兵庫県南部地震や新潟県中越地震・中越沖地震、東北地方太平洋沖地震を経験し、首都直下地震や、南海トラフ巨大地震の発生が懸念されている現代と酷似しています。

貞観地震のメッセージは、小倉百人一首の中にも残されているようです。多賀城の近くにある「末の松山」と「沖の石」を詠んだ2つのうたがあります。清原元輔が後拾遺和歌集で詠んだ「契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 浪越さじとは」と、二条院讃岐が千載和歌集で詠んだ「わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし」です。「末の松山」は津波が越さなかったのに対して、「沖の石」は水浸し、と言おうとしているようにも思います。今回の震災でも「末の松山」には津波は到達せず、「沖の石」は津波に 2m 程度浸かりました。

さらに、1611 年に起きた慶長三陸地震津波では、津波が到達しなかった場所に、浪分神社や浪切不動が作られ、不動像が海を睨みつけています。三陸には津波の石碑も沢山残っています。この地震の後に作られた奥州街道は、津波危険度が低い場所を通っています。この結果、東北本線沿線の主要都市の被害は軽微におさまりました。

先人たちは、様々な手段で津波の怖さを後世に伝えてくれているようです。皆さんも、一度、地元の郷土史を今一度読み返してみてもはどうでしょう。